

「メランコリーレイクサイド」

著者名 大久保佑馬

■ジャンル

青春・ロマンス・ファンタジー

■企画意図

青春時代に起きた些細なすれ違いが大人の恋愛ドラマを揺さぶり、メランコリーな気分させるラブストーリー。過去の出来事を引きずる主人公と、過去なんて気にしていないヒロインの対比を描き、現在と過去のシーンを交錯して見せることで主人公の気持ちの葛藤を表現し、切ない気持ちを実際立たせます。

■あらすじ

学生時代に両思いだったヒロインに罰ゲームでウソの告白をしてしまったという後悔を引きずる主人公は、大人になっても純粋な恋愛に向き合えない。友人の結婚話をきっかけに主人公はヒロインに渡そうとしていた五千円の指輪を十年越しに渡そうと決心するが、同時にヒロインは近々結婚すると打ち明ける。

■本編の文字数

5241文字

登場人物

大江俊哉(14 24) 中学生・社会人2年目
山岸滯(14 24) 大江の同級生・友人

榎野祐二(14 24) 大江の同級生・友人
千葉嘉人(14 24) 大江の同級生・友人
桑名詩織(14 24) 大江の同級生・友人
河野美咲(14 24) 大江の同級生・友人

中年男(44) 未来から来た男
宇藤雪乃(23) 大江の家に入りびたる女

○〈回想〉学校・渡り廊下（夕）

外は雨が降っている。

向かい合わせで立っている大江俊哉

（14）と山岸滯（14）。

滯「（怒って）全部ウソだったってこと!!」

大江「え……」

滯「詩織に聞いた、私に告白したのは罰ゲームだったって。本当は私の事好きじゃないんでしょ！」

口ごもっている大江。

滯「何か言うことがあるんだったら言っ

よ！」

大江「いや……」

滯「もういい！」

雨の中を走っていく滯。

悲しそうな表情で見送る大江。

○大江の部屋（朝）

着替えている大江（24）。

ベッドから眠そうに起き上がる宇藤雪

乃（24）。

大江「俺、もう出るから。鍵ポストに入れと

けよ」

雪乃、何かを探す仕草。

雪乃「あれ、私メガネどこやった？」

気にせず着替えている大江。

雪乃が机の上を探っていると、隅に置

いてあった小さな缶の箱が床に落ちる。

落ちた衝撃で蓋が開き、中から安物の

指輪が出てくる。

指輪に気づく雪乃。

雪乃「ん、なにこれ。指輪？」

反応して雪乃の方を向く大江。

雪乃、指輪を見ながら、

雪乃「（笑って）なに、俊哉こんな安物の指

輪すんの？もっとましなの買えば」

大江、雪乃の方へ寄ってきて強引に指

輪をうばう。

大江「じゃあな。もう急に泊めてとか言うん

じゃねえぞ」

大江、指輪をジャケットのポケットに入れて玄関を出ていく。

○（回想）アクセサリーショップ

そわそわした様子で陳列された指輪を

見ている大江（14）。

シンプルなデザインの指輪を手取る。

5000円と書かれた値札。

店員が寄ってくる。

店員「どのような商品をお探しで？」

大江「いや。大丈夫です。これください」

× × ×

レジ前に置かれた指輪。

店員「プレゼント用にラッピングしましょう

か？」

大江「いや、いいです。そのまま」

店員が指輪を袋に入れるのを、そわそわしながら見ている大江。

店員「5250円ですね」

大江、千円札4枚と大量の小銭で払う。

店員「（小銭を数えながら）ちよ・うどで

すね」

大江、袋を取って、足早にお店を後にする。

○（回想）大江の実家・リビング

袋から指輪を取り出す大江。

指輪を持ったまま周りに何かを探す素振り。

大江「ラッピングすりゃあよかった」

大江、机の隅にチョコレートの小さな缶の箱を見つける。

缶を開けて、チョコレートを口に詰め込む。

空いた所に指輪を入れる。

大江「よし」

大江、缶を閉じてリビングを出る。

○〈回想〉学校・渡り廊下

外は雨が降っている。

滯と向き合う大江、手には指輪の缶を
隠し持っている。

大江「あのさ」

滯「（怒って）全部ウソだったってこと!!」

大江「え……」

茫然とする大江。

○レンタカー屋前（朝）

レンタカー屋前に集まっている榎野祐

二（24）と千葉嘉人（24）、桑名

詩織（24）、河野美咲（24）、滯

（24）。

千葉、歩道の方を見て気づいたように、

千葉「おっ。やっと来た」

一同、同じ方向を見る。

榎野「おせえよ」

詩織「やっぱりビリ」

大江（24）が小走りでやってくる。

大江「わりいわりい」

榎野「お前は大事なドライバーなんだから頼むぞ」

大江「お前もいかげん免許取れよ」

榎野「シテイボーイには要らねえんだよ」

笑いながらレンタカー屋に入る一同。

○レンタカー車内（朝）

車内でグランピングの雑誌を広げて見ている榎野。

榎野「今日、ここ行くの!!マジ!!激熱じゃん！」

美咲「え?どれ？」

雑誌を見せあってはしゃぐ一同。

黙々と運転をしている大江、バックミラーを見る。

バックミラーに映った濡、外の景色を見ている。

軽く息をついて運転に集中する大江。

○〈回想〉海岸線（夕）

海岸線を自転車で走る中学生の大江たち6人。

大江と漣だけは遅れて後ろを走る。

槇野、後ろを向いて、

槇野「（声を張り上げる様に）大江、山岸早く来いよ」

大江「ちよつと待てって」

漣「みんな早いんだって」

自転車を停める前の4人。

千葉「やっぱりあの2人は遅いよな」

詩織「老夫婦みたいだよね」

槇野「（大江と漣に向かって）この前ウソ告させたのは悪かったけどさ。俺は本気で2人が付き合えばいいと思ってたんだぜ」

4人に追いつく大江と漣。

漣「冗談言わないでよ。そんなわけないじゃん」

笑いながら自転車を発進する一同。

複雑な顔をしている大江。

○グランピング場

大江たちのレンタカーが入ってくる。

車から降りてくる一同。

テントの中やバーベキューコンロを見
てはしゃいでいる一同。

槇野「おい！すげーぞ！」

美咲「テンション上がる！」

詩織「（遠くを指さして）あっちの方には湖
もあるって」

滯「え、すごいじゃん！」

車から荷物を降ろしている大江、楽し
そうな滯の姿を見ている。

○同（夕）

お酒を飲みながらバーベキューを楽し
んでいる6人。

× × ×

焚火を囲んで談笑している6人。

千葉「今日、こうやって久々に6人集まれて

さ、実はみんなに伝えたい事があるんだ」

大江「なんだよ急に」

千葉「俺と詩織は結婚することになりました！」

槇野「え！？うそ？」

千葉「ほんと」

微笑んでいる詩織。

美咲「わぁおめでとう！詩織」

澪「やっとだね」

槇野「まあでもそうか。お前ら付き合っても

う10年くらい経ってるもんな」

千葉「中3の夏からだからな」

詩織「祐二は結婚とかどうなの？彼女いるん

でしょ？」

槇野「俺？まあいるけど、結婚とかはまだ全

然だよ。それより大江はどうなんだよ。お

前ずっと彼女いないだろ？」

大江「いや、別に」

槇野「何だよ別について。どうせまだ合コンで知り合った子とその場しのぎの恋愛してんだろ」

大江「うるせえよ」

美咲「そうなの？そろそろちゃんとした彼女見つけないと」

槇野「だよな。こいつ恋愛になると真面目になれないんだからさ。ちよつと河野で告白の練習するか？」

美咲「わたし？」

詩織「ウケる」

千葉「やつとけよ」

大江「はあ？やだよ」

美咲「やだよもちよつと違うんですけど」
笑っている滯。

○同（夜）

静まり返ったグランプイング場と星空。
火が消えている焚火の後。

○湖のほとり（夜）

一人物思いにふけながら歩いている大江。

ジャケットのポケットに手を入れ、指輪が入っていることに気づく。

立ち止まって指輪を眺める。

指輪をポケットに戻して湖の方を眺める。

心地よい風がふいて目を閉じる。

男の声「何か考え事か？青年」

ハッと目を開けて声のする方を向く大江。

10m程離れた所で一人の中年男（44）が釣りをしている。

大江「え？」

男「考え事だろ？夜にこんな所一人で歩いて」

大江「いや、まあ」

男「聞いてやってもええぞ」

大江「いやいいですよ」

男「なんで？」

大江「あの、個人的なことなんで」

男、魚を逃がしたように針を引き上げ、

男「なるほど、素直になれないってか」

凶星だという表情をする大江。

男、針に餌をつけながら、

男「じゃあおっさんの悩み聞いてもらっていいか？」

いか？」

大江「え……はい」

男、針を湖に投げて、

男「おっさんな、未来から来たんだけどさ」

大江「（意表をつかれたように）はい？」

男「だから未来から来たんだけど、うまいこ

と過去が変えられなくてよ」

大江、面白がるように笑って、

大江「え、なんですか？」

男「何が？」

大江「何で未来から来たんですか？」

男「ああそれがさ、前の奥さんとはつまらない

ことで喧嘩繰り返して、勢い余って離婚し

ちまってるな。あの離婚届さえなければって

今頃思い返しちやつてさ。過去に戻って離

婚届破りに来たんだよ」

大江「はあ……」

男「でもよ。未来であいつは違う男と結婚してめちやくちや幸せそうなんだよ。俺には見せなかった笑顔しててさ。あの顔を思うとなかなか破りに行けねえんだよ」

大江「そうなんですか」

男「そんなことねえか？好きだった女が居たのにロクに『好きだ』なんて素直な気持ち伝えねえで、次の瞬間自分は彼女を幸せにする人間じゃなかったって気づくんだ。悲しいけど事実なんだよな」

真に受けて考え込んでいる大江。

男「結局過去に行ったって何にも変わらないんだよな」

大江「破りに行かないんですか？離婚届」

男「え？」

大江「今から離婚届破りに行って奥さんに

『好きだ』って伝えるんですよ。そしたら
取り返せるんじゃないんですか？」

男、少し考えて、

男「取り返しても俺が幸せにできなかったら
どうする？俺と別れば彼女は幸せになる
って分かってるんだ。その幸せを奪うこと
は本当の愛なのか？」

大江、何も言えない様子。

男、何か思い出したように釣り具を片
づけ始める。

男「そうだ。今日の夜は雨が降るんだった。
お前もこんなところで思いつめてないで早い
とこ帰れよ」

男、立ち上がって大江に近づき、傘を
差し出す。

男「ほれ、これやるから」

大江「ああ……」

戸惑いながらも傘を受け取る大江。

男「じゃあな」

男、去っていく。

大江、しばらくの間感慨深い表情で男の背中を見送る。

濤の声「俊哉。ここに居たの」

振り返る大江。

濤が歩いてくる。

濤「みんなもう寝ちゃった。なんか眠くなくて散歩しに来ただけど、気持ちいいね」

湖の方を向いて深呼吸をする濤。

濤「でも嘉人と詩織の結婚はびっくりした。

まあいつかするとは思ってたけどさ。どう思った？」

大江「俺もびっくりしたよ。まああいつらほとんどん似てきたもんな」

濤「夫婦は似てくるってやつ？」

笑う2人。

濤「私たちこれからどうなるんだろうね？」

大江「ん？」

漣「中学からの付き合いでさ、何でも一緒に
経験したけど、みんな大人になって結婚し
て、私たちの関係って変わっていくのかな」

大江「山岸はどうしたい？」

漣「私はずっと6人がこのままでいたらな
って思う」

大江「山岸が言うならみんな毎年集まるよ」

漣「（微笑んで）俊哉っぽい。俊哉っていつ
もみんなの意見を仲介してまとめてくれる
よね」

大江「引っ込み思案なだけだよ」

漣「それが俊哉の良いところだって。いつも
気をつかってて。時にはわがままな意見も
言えばいいのって思うけど……」

照れくさそうにする大江。

しばらくの沈黙。

大江・漣「（同時に）あのさ」

漣「何？」

大江「いやいいよ山岸から言って」

漣「もう。何か言うことがあるんだっただけ言
ってよ」

× × ×

〈フラッシュ〉

渡り廊下にいる中学生の大江と漣。

漣「（怒ったように）何か言うことがあるん
だっただけ言ってよ！」

× × ×

緊張する表情になる大江。

大江、ポケットに手を入れる。

大江「実はさ……」

漣が髪をかき上げた瞬間、左手の薬指
に指輪が見える。

固まってしまおう大江。

漣「なに？」

大江「え……ああ……それ婚約指輪？」

漣、照れくさそうに薬指を見せて、

漣「あ、気づいた？実は私も結婚するんだよ
ね」

大江「うそ」

漣「そう。みんな嘉人と詩織の結婚で盛り上がってるからなかなか言い出せなくて」

大江「……相手はどんな人？」

漣「年上の会社経営してる人。こんなこと言ったらまた祐二から『金目当てだろ』とかからかわれそうじゃん」

愛想笑いをする大江。

漣「でも何となく俊哉には言っところと思っ
てさ。一番信頼できるから」

複雑な表情をする大江。

大江「（ボソボソと）信頼できるかな……」

中学であんな事したのに」

漣「何の事？（気づいたように）ああ、ウソ
で告白したやつ？」

大江、漣の様子を伺うように小さく頷く。

漣「あんなの気にしてるわけないじゃん。中
学生がやったことだし、確か罰ゲームでや
らされたことでしょ？」

大江「まあそっか……」

大江、俯いて軽く呆れたように笑う。

滯「で、結局私の言う事先に言っちゃった。

俊哉のは？何だったの？」

ポツポツと雨が降る。

大江、手のひらで雨を確認して、

大江「（明るく振舞う様に）いや、大した事
じゃない。ほら、雨が降ってきたから一緒
にこの傘使う？って言いたかっただけ」

大江、傘を見せる。

滯「傘持ってたんだ。助かる！じゃあ、帰ろ
つか」

大江「うん」

雨が強くなっていく。

傘をさす大江。

滯、傘の中に入り込んで傘を支えるよ
うに大江と手を重ねる。

緊張した表情で重なる手を見る大江。

○（回想）校舎裏（夕）

建物の陰でじやれている中学生の大江
と榎野と千葉。

榎野「（小声で）行って来いよ！」

校舎裏へはじき出される大江。

後ろ姿の漣（14）が音に気づいて振
り返る。

漣「俊哉」

緊張した表情で走って近寄る大江。

大江「山岸。実はずっと好きでした。付き合

ってください」

頭を下げて手を差し出す大江。

数秒後、大江の手をそっと取る漣。

びっくりして頭を上げる大江。

笑顔の漣。

漣「じゃあいっしょに帰ろっか」

漣、大江の手を引いて歩いていく。

陰に隠れている榎野と千葉、2人の様
子を見て驚いて固まる。

大江、戸惑いながらも嬉しそうに漣に
ついていく。

○湖のほとり（夜）

傘をさして2人歩く大江と漣。

漣「今日はなんか中学時代に戻ったみたいで
楽しかったな」

大江「ちよつとき、小石投げていい？」

漣「え？海辺でよく男子やってたけど……雨
だよ？」

大江「いいじゃん」

大江、雨の中小石を探しだす。

漣「（心配そうに）ちよつと俊哉」

大江、小石を投げるふりをして思い切
り指輪を湖に投げる。

漣、飛んでいく指輪を見て、

漣「今、光んなかった？」

大江「うそ？」

漣「ほんと。小石がキラッって」

大江、ずぶ濡れで哀しげに微笑む。

大江「青春の輝きってやつじゃない？」

漣「（微笑んで）男子って変わらないよね」

2人、傘をさして帰っていく。

終